

校長研修だより26

教師と生徒の二者関係①

～教師のエンターテイメント性～

2021・9・27 重枝 一郎

「どうも生徒たちとうまくいかない」

「言葉や態度を生徒たちに理解できるように置きかえているのに・・・」

これは「教師の対応が、自分が思っているように伝わっていない」「タイミングが悪い」つまり、状況にマッチしていないのである。生徒は、教師の思いを察して反応しているのではなく、自分が受け取った印象に素直に反応しているのである。

「カウンセリングマインド」や「説教」の時代は終わった。今の教師に求められているのは「エンターテイメント性」と言われる。生徒は感受性が強い。それは、防衛本能だと言える。理屈ではなく感覚的に、大人の本質を見抜く。

教師は得てして、勘違いをする。生徒たちは、教師の思いを察知して行動しているのだと。教師の「説教」に従っているのだと。しかし、そんな甘い世界はない。生徒たちは、教師の「印象」に素直に反応している。それは、日常的に受け取っている表情や言葉や立ち居振る舞い等から得る「印象」である。バーバルとノンバーバルの両方からの情報で、本能的に判断しているのである。

小学校高学年から中学生の時期は、思春期に入り、反抗期と言われる。教師を一人の大人として評価する。例えば、この先生は信頼できるのかどうか……。口では偉そうなことを言っているが、態度が伴わないとそれを鋭く見抜かれる。その教師の背景を見ようとする。つまり、教師に人生哲学があるかどうかという「人間性」が大事になる。

生徒も変化している。生徒の負の変化に対してより強制性を強めていくと逆に大きな荒れにつながる場合がある。生徒の荒れの根っこは「インナールールの欠如」である。

「インナールール」とは心の内の内的なルールのことであり信頼関係に大きくかわる。対して「アウトルール」とは心の外の外的な世界にあるルールのことであり集団生活の規律などになる。「アウトルール」に対して外的な世界から押し付けられた強制的なものだという感覚が強いと、生徒は逸脱・反発しようとする。ところが、感情を共有し、信頼関係が生まれると、同じルールでも不快感のないものとして受容するようになる。これが「インナールール」である。

だからこそ、教師は「大根役者」であってはならない。その事実を謙虚に受け入れて、自分自身を自己点検する習慣をもつことが、エンターテイメント性を身に付ける第一歩になる。教師は無意識に、自分が「評価者」だと思っている。しかし、常に生徒たちや保護者から「評価」されているのが「教師」である。

だからこそ、「1メッセージ」で自分を語る事が重要である。そして、日常の行動

を意識する。思春期の生徒が最も嫌うのは、「はぐらかす教師」「言行不一致の教師」になる。勇気をもって定期的に自己点検をしていくことは大切である。

【雑談】

9月24日に「4P 教育研修会」という、福岡市、福岡県、北九州市、公立高校のPTA 協議会の役員さん対象の講演を頼まれ、話をしてきた。私の演題は「子どもの変化と教育観」というざっくりとした感じで学校教育や生徒指導を総合的に過去の思い出等を入れながら話してきた。実は、何か本校の広報につながらないかという下心はたっぷりあった。（当然広報はしてきた）

私は「出会うべき時に、出会うべき人と会っている」という考えをこれまで大切にしてきた。だからこのような講演も引き受けてきた。今、女学院の先生方との出会いもそういう思いである。

今回、この講演会の参加者の中に、九州大学の先生の佐藤剛史（さとうごうし）氏が参加していた。（後日メールをいただき参加していることを知った）

この佐藤先生は著名な方で、作家、食育研究者としてテレビのコメンテーターや講演をされている方であった。私の講演の感想等も佐藤先生のブログで見ることができる。よかったら見て。ちなみに本校の学校 HP もリンクではってかれている。